一般演題「腰仙椎固定　工夫」

1-2-3-4

片側経皮的椎弓根スクリューを併用したLLIFの成績

Radiographic analysis of unilateral versus bilateral instrumentation in one-level lateral lumbar interbody fusion

福島　成欣[1]、大島　寧[1,2]、瀬川　知秀[1]、湯澤　洋平[1]、高野　裕一[3]、稲波　弘彦[1]

[1]稲波脊椎・関節病院、[2]東京大学医学部附属病院整形外科・脊椎外科、[3]岩井整形外科内科病院

【はじめに】近年，腰椎変性疾患に対するLateral Lumbar Interbody Fusion(以下LLIF)が広まっているが，国外では前方固定のみの報告もあり，後方固定については一定の見解が得られていない．【目的】片側のみと両側の経皮的椎弓根スクリュー（Percutaneous Pedicle Screw以下 PPS）を併用したLLIFの術後成績を比較した．【対象・方法】2013年5月～2014年12月までに当院で一椎間のLLIFを行った90症例（片側PS群41例，両側PS群49例）を対象とした．症例は平均年齢63.3歳（21-90），平均観察期間14.8ヶ月，男性39例女性51例であった．体位変換時間を含んだ手術時間・術中出血量・放射線被ばく時間・周術期輸血量・術後入院日数，また術前後のレントゲン像から椎体の癒合率ならびに最終観察時の椎体間の圧潰率，および術後合併症について比較検討した．【結果】両群間において手術時間は片側PPS群平均83.1分（42-216）に対し，両側PPS群119.2分（60-277）であり片側PPS群で有意に短かった．出血量・放射線被ばく時間・輸血量および入院日数は二群間で有意差はなかった．また最終観察時の椎体癒合率・椎体間の圧潰率については有意差がなかった．術後合併症は片側PPS群では5例，両側PPS群では1例で再手術を要し，片側PPS群では再手術率が高かった．両側PPS群の再手術は隣接椎間障害であったのに対し，片側PPS群での再手術の原因は全例cageの緩みに起因するものであった．【結語】片側PPS群のLLIFでは両側PPS群と比較して，手術時間は短く，術後の椎体圧潰率ならびに癒合率について差はみられなかったが，cageの緩みに起因する再手術症例が多くみられた．